

平成27年度ふるさとの魅力発見・継承推進事業に係る教材作成
～道徳教材の活用及び作成の手引き～

先人の生き方から学ぶ道徳の授業展開 ～魅力あふれる郷土の先人～



しげみつ まもる
重光 葵



にこうじょ
「二孝女」と呼ばれた姉妹

平成28年3月
大分県教育委員会

目次

はじめに	1
本書の活用の仕方	2
I 小学校（高学年）用の道徳教材	
1. 「二孝女」って、何？	4
2. 道徳教材「病気の父を迎えに常陸国へ」	6
3. 教材研究編	9
3-1 内容項目	3-2 教材の分析
3-3 発問の構成	3-4 学習指導案
II 中学校用の道徳教材	
1. 「重光 葵」って、どんな人？	16
2. 道徳教材「日本は東西のかけ橋」	18
3. 教材研究編	21
3-1 内容項目	3-2 教材の分析
3-3 発問の構成	3-4 学習指導案
III 地域教材の開発と活用	
1. 地域教材の意義	28
2. 大分県にある魅力的な素材	29
3. 地域教材作成の手順	30
作成協力者等，参考にした書籍や資料等	32
おわりに	33
児童生徒用の教材	巻末

はじめに

大分県教育委員会では、平成26年度から「ふるさとの魅力発見・継承推進事業」に取り組み、子どもたちの郷土を愛する心の育成を目指しています。子どもたちのふるさとに対する誇りや愛着を養うことは、自己を大切にし、他者を尊重する態度につながります。これからの変化の激しい社会を生き抜くためには、子ども一人一人が「郷土」という心の拠りどころをもつことが必要です。そこに、ふるさとの魅力を素材にして教材を作成する意義を見出すことができます。

本県には、子どもたちにぜひ知ってほしい先人の伝記や逸話があります。昨年度は本事業に関わり『道徳教育の一層の充実』というハンドブックを作成し地域教材の開発方法の一例を示しました。今年度はそれに基づき、史談会や先哲史料館、歴史資料館の方々と協同して、小学校用は「^{にこうじょ}二孝女」の逸話を、中学校用は「^{しげみつ まもる}重光 葵」の生き方を教材化しました。

道徳の授業における教材は、子どもたちのよりよい行為を支える内面的資質を育てる上で、極めて大きな意味を持つものです。

ぜひ、本書を活用して、ふるさと大分の素材を生かした教材開発に挑戦したり、子どもたちが自分との関わりで考え、議論し合うような授業を創造したりすることを期待しています。

終わりにになりましたが、本書の作成に関わり、ご指導をいただいた多くの皆様方に対し、心から感謝申し上げます。

平成28年 3月

大分県教育庁義務教育課長 後藤 榮一

本書の活用の仕方

こんなときに、活用してください。

◇道徳の授業実践

実践

- ふるさと大分の魅力を子どもたちに伝えたいときに！！
- 道徳の研究会や校内研修等の手引きが必要なときに！！
- 校内で、互見授業を行うときに！！

◇道徳の授業づくり

構 想

- 指導案完成までの手順を理解するときに！！
- 教材研究の方法を知りたいときに！！
- 道徳の授業における発問等の手立てを考えるときに！！

◇道徳の教材づくり

創 作

- 道徳教材の作成の手順を知りたいときに！！
- 道徳教材の作成の留意点を理解するときに！！

※本書は、「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」，「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」（平成27年7月）に準拠しています。

※本書の巻末に収録している教材は、印刷、コピーをして活用してください。

本書においては、「道徳の授業」という言葉を使用しています。本書における「道徳の授業」とは、道徳の時間（又は道徳科）の授業のことを指します。

平成27年に学習指導要領等が改正され、小学校では平成30年（中学校は平成31年）に、「道徳の時間」が「特別の教科 道徳（道徳科）」となり、平成27年から移行期間となっています。市町村によっては、先行実施するところもあるかもしれません。

そこで、本書では「道徳の時間の授業」又は「道徳科の授業」のことを指す意味で、「道徳の授業」という言葉を使用しています。

I 小学校用の道徳教材 (高学年)

I 章は、3部構成になっています。

1. 教材になった出来事の紹介です。授業にも活用できます。
2. 教材の概要や作成の意図を示しています。
3. 学習指導案ができるまでの教材研究の方法の一例を示しています。研究会や校内研修等にも活用できます。



1. 「二孝女」って、何？

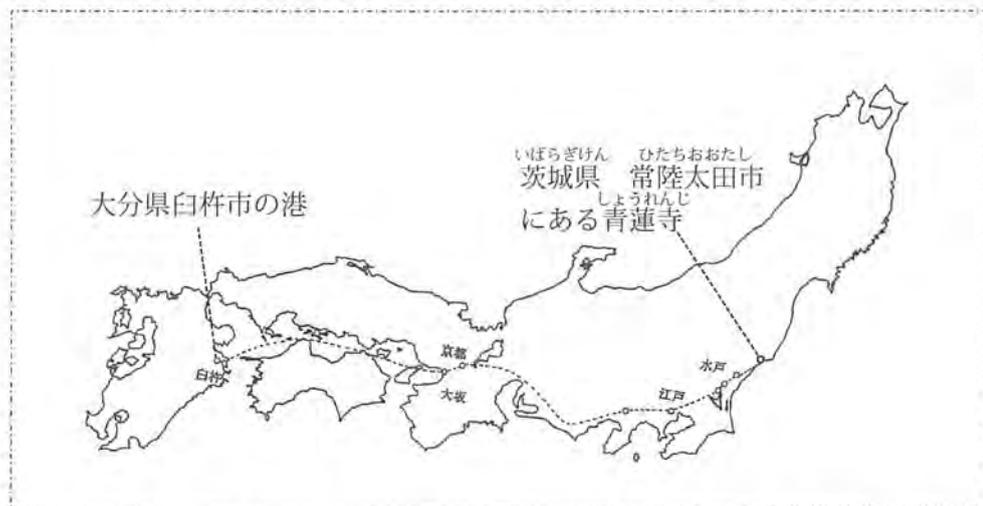


①「二孝女」ってどういう意味？

「二孝女」という言葉は、「二人の親孝行な女性」という意味です。
200年前の江戸時代に生きた「つゆ」と「とき」のことです。

②どんな親孝行をしたの？

「つゆ」と「とき」の姉妹は、旅の途中で病気になった父親を常陸国（茨城県）まで迎えにいきました。その道のりは約1200km（300里）にもなりません。江戸時代の旅はバスも電車ありません。2人は約1200km離れた常陸国（茨城県）まで、父親を迎えに行くために2人で旅をしたのです。



白杵の港から大阪の港まで、17日間の船旅でした。そして、大阪の港から父親がお世話になっている常陸国（茨城県）のお寺まで、歩いていきました。約2ヶ月間にわたる長い旅でした。

③姉妹は、旅の途中でどんな人と出会ったの？

うすきはん さむらい いなばしげおき
白杵藩の侍 稲葉重置

2人は旅の途中で、偶然にもふるさと白杵藩の侍に出会います。
重置は、仕事で江戸に向かう途中でした。重置は2人に食事をごちそうし、江戸までつきそってくれました。

やしき ひらお さすけ
江戸屋敷の平尾佐介

平尾佐介は白杵藩江戸屋敷の責任者でした。江戸で仕事していた佐介は、2人の父親がお世話になっているお寺に手紙を書いたり、旅のお金を渡したりしました。

2人の旅を助けた泊屋勘兵衛

常陸国に入ると、大雨にみまわれた2人は、勘兵衛夫婦の好意で、家に泊めてもらいました。客人用のふんわりした布団で、ゆっくり休んだのでした。

危険なことも・・・

旅の途中はいいことばかりではありません。山道を歩いていると突然、大男に道をふさがれたり、宿に泊まっていると知らない男からおどされたり、危険なこともありました。

④姉妹は、常陸国（茨城県）の人たちから、どんなことをしてもらったの？

村の医者であった猿田玄碩は、姉妹のやさしさに心を打たれ、1日も早く父親の病気が治るように治療すると約束しました。

また、玄碩の母親は、寒さを防ぐためにあったかい上着をあげたり、お金を渡したりしました。

村に住んでいる仁衛門は、姉妹の父のことを心配し、何度も見舞いに来ました。

仁衛門は自分が貧しい暮らしをしているのに、たくわえていた米やあずきを姉妹にあげたのでした。

水戸藩からは、暖房用の薪や食料、お金等が支給されました。また、父親と姉妹がふるさとに帰るときには、親子3人に新しい旅用の服と父親が乗るかごが支給されました。

1887年に造られた二孝女の記念碑
(白杵市立川登小学校)



白杵市野津町にある二孝女の供養碑

二孝女が描かれた白杵市立川登小学校の校舎



2. 小学校（高学年）用の教材

お知らせ

- 授業で使う児童用の教材は、本書の巻末に収録しています。
- 巻末に収録している教材には、挿絵や語句の説明等もあります。
- 授業の際には、巻末の教材を印刷してご使用ください。

病気の父を迎えに常陸国へ ～あたたかい心に支えられた姉妹の旅物語～

1. あらすじ

○プロローグ

- ・ 2人の娘が青蓮寺しょうれんじにたどり着いた場面
- ・ 2人の娘の紹介
- ・ 物語の起源

○父を迎えに 300 里

- ・ 父、初右衛門は7年もの間、音信不通
- ・ 父、初右衛門の知らせを聞いた2人
- ・ 父を迎えに常陸国（茨城県）に向かう決意をする2人
- ・ 2人の旅の様子（旅のきつさ、見ず知らずの人たちのあたたかい心）
- ・ 7年7か月ぶりに再会する親子

○村人の思いやりの心とつゆとよきの感謝の心

- ・ 病気の父に対する村人たちの思いやり
- ・ 父がお世話になっていた村の人たちにお礼まわりをする2人
- ・ 2人の懸命な姿に感動する村の人たちや水戸藩の役人たち

○ふるさとへの旅立ち

- ・ 常陸国を旅立つ親子
- ・ 水戸藩の計らいや村人の様子

○つゆとよきの悩み

- ・ ふるさとで広がる2人の評判
- ・ 父に思いを告げる2人
- ・ 父の言葉を聞いて、考える2人

○エンディング

- ・ その後の2人の様子
- ・ 「二孝女」という言葉を紹介



2. 教材に盛り込んだ内容について

○ねらいとする内容項目（感謝）を明確にするために

「二孝女」の逸話は、姉妹とその父親が多くの方々の親切や思いやりに支えられ無事にふるさとに帰ってきたことを伝えています。同時に、姉妹と父親は、人々から受けた親切や思いやりに対して感謝の気持ちを忘れなかったそうです。

本教材では、姉妹が感謝の気持ちを行動で表す場面と、姉妹が今の自分たちがいるのは多くの人々の支えがあるからだと感じ始める場面を描きました。



○児童が立ち止まって考える教材にするために

教材の後半に、つゆとときが父の言葉を聞き、だまって考える場面を設定しました。

いわゆる、「教材の行間」と呼ばれる部分です。「教材の行間」があるから、児童たちは「つゆとときはどんなことを考えたのだろう。」と想像力を働かせたり、「自分だったら何を考えただろう。」と自分との関わりで考えたりするのです。



○「二孝女」の魅力を伝えるために

「二孝女」の魅力は、それを聞く人や読む人が、それぞれに感じ、考えることができることです。

この教材では、つゆとときの一途で懸命な姿を児童たちに伝えたいと考え、旅の途中よりも茨城県に到着した後の出来事を中心に描きました。

もちろん、父を迎えに行くことを決意する場面や旅の途中の多くの出会い等も、この逸話の魅力です。この教材に興味をもった児童が、「二孝女」のことを調べたり、関連図書（※）を読んだりしてくれれば幸いです。

※関連図書：「実話 病父を尋ねて三百里」 著 橋本留美 新日本文芸協会

3. 補助教材について

「200年の時を経てつながる人と人との絆」（巻末に収録）

＜補助教材の概要＞

- 大分県臼杵市と茨城県常陸太田市の「二孝女顕彰会」の活動。
- 臼杵市二孝女顕彰会の荘田啓介氏の紹介。
- 荘田氏ら約50人が「お礼参り訪問団」として、茨城県常陸太田市を訪問。
- 平成27年10月10日、大分県臼杵市と茨城県常陸太田市は姉妹都市提携。



平成23年10月常陸太田市を初めて訪問。 平成27年10月10日 姉妹都市調印式。

※写真は、常陸太田市より提供。

「二孝女」の教材とは別に、上記のような内容で補助教材を作成しました。この補助教材を使って、児童に考えさせたり、考えを書かせたりする必要はありません。

授業の終末で、読み聞かせて、児童に学習したことの余韻をもたせ、静かに終わるようにします。

3. 教材研究編

3-1 内容項目

小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（平成 27 年7月）において、内容項目に関して述べられていることを整理してみます。

◇本教材に関する内容項目 【感謝】

〔第5学年及び第6学年〕

日々の生活が家族や過去からの多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それに応えること。

◇内容項目の概要

- ・よりよい人間関係を築くためには、互いを認め合うことが大切。その根底には、相手に対する尊敬と感謝の念が必要。
- ・人々に支えられ助けられて自分が存在するという認識に立つとき、相互に尊敬と感謝の念が生まれてくる。
- ・感謝の気持ちは、人が自分のためにしてくれている事柄に気付くこと、それほどのような思いでしてくれているのかを知ることで芽生え、育まれる。

◇感謝の対象

低学年	家庭や学校など、身近で日頃世話になっている人々。
中学年	家族など日頃世話になっている身近な人々に加え、日常の生活を支えている地域の人々や、現在の生活の礎を築いた高齢者などの先達。
高学年	人のみならず、多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っている生活そのもの、更にはその中で自分が生きていることに対する感謝まで広げる。

◇高学年の指導に当たって

- ・過去から、人々が何を願い、何を残し伝えてきたのか、それは自分の生活とどう関わり支えられているのかに気付くことができるようにすることが大切である。
- ・温かなつながりの中に自分の生活があることに感謝し、人々の善意に応えて自分は何をすべきかを自覚し、進んで実践できるようにするところまで指導する必要がある。

「毎日の生活の中で多くの人々に支えられているんだ。」
「当たり前になっていることも、それを支えてくれる誰かがいるんだ。」

子どもたちがこんな意識を、自分の生活と重ねながら持てるような授業をしたいですね。

他の内容項目においても、解説書で述べられていることを自分なりに整理してみてください。



3-2 教材の分析 (例)

人の行動や言葉の裏側には「心」が存在する。それは、ある考え方やその人がもつ価値観等である。道徳教材には、人物の道徳的な行為が描かれている場合が多い。人物の道徳的な行為の背景にある価値観等を、指導者がまず明らかにしておく必要がある。

登場人物の言葉や行動	言葉や行動の背景にある価値観等
<p>ある日のこと、2人は父に悩みを伝えた。</p> <p>「村の人たちは、私たちのことをほめてくださいますが、なぜか素直に喜ばません。<u>水戸藩の皆様や旅の途中で出会った多くの方々から受けたご恩にこたえたくても、こたえることができません。どうすればよいのでしょうか。</u>」</p> <p>2人の話を聞いた初右衛門は、目をとじて静かにこたえた。</p> <p>「<u>どうすることもできないが、今の私たちがこうして生きているのはどうしてなのか、これからも考え続けようではないか。</u>」</p> <p>父の言葉を聞き、<u>2人は、しばらくだまっていた。</u></p>	<p>○他の人々の善意に対して、感謝の思いを伝えたり、善意に応えたりすることは大切なことだ。</p> <p>○多くの人々に支えられ、今の自分の生活が成り立っているのだ。(気付き)</p> <p>○多くの人々に支えられ、今の自分の生活が成り立っているのだ。(気付き) 自分は何をすべきだろう。</p>

考えられる発問の例

- 「どうすることが、ご恩にこたえることになるのでしょうか。」
- 「つゆとときは、どうすればよいのでしょうか。」
- 「つゆとときは、悩む必要があるのでしょうか。」
- 「つゆとときが悩んでいることについて、どう思いますか。」
- 「父初右衛門は、2人に何を伝えたかったのでしょうか。」
- 「2人は父の言葉を聞き、どんなことを考えているのでしょうか。」等

どのような授業を行うかは、授業者の意図によります。どのようなことをじっくり考えさせたいのか、またどのようなことに気付かせたいのか、授業者が明確にして発問を決めることが大切です。

また、次のことに留意してください。教材に書かれている言葉や文が答えになるような発問では、読み取り中心の学習になってしまいます。



※ここでは、一場面を取り上げています。実際にはいくつかの場面を取り上げ、分析する必要があります。

3-3 発問の構成 (例)

道徳の授業づくりでは、発問の構成が大切である。言わば、授業の骨組みともいえる。発問の構成について、小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編には次のように示されている。

発問を構成する場合には、授業のねらいに深く関わる中心的な発問をまず考え、次にそれを生かすためにその前後の発問を考え、全体を一体的に捉えるようにするという手順が有効な場合が多い。

<発問を考える順序>

- ・ウ⇒イ⇒エ⇒アという順序で発問を考え、授業展開の全体像を描いた。
- ・ウは、中心的な発問であり授業のねらいに関わる。授業では多くの時間をかける。
- ・イは、ウにつながっていくような発問である。イの学習が、ウの学習を支えていく。
- ・エは、実生活への意識化を図るための発問である。ここでは無理に発表させなくてもよい。ノートにまとめさせたり、イメージマップ等を書かせたりすることも考えられる。
- ・アは、授業のスタートであり、短時間で本時の学習の見通しを持たせたり、動機付けを行ったりするものである。
- ・ア、イ、エの発問は、ウを最大限に生かすための発問であり、短時間で行う。

	発問の構成	発問の意図
ア	○『他人から親切にされたら、 <input type="text"/> べきだ。』 <input type="text"/> の中には、どんな文が入りますか。 ・ていねいにお礼を言うべきだ。 ・感謝の気持ちを態度で表すべきだ。	教材の中心場面と関連のある事柄について考えを持たせておき、教材を読んだ後に問題意識を喚起したい。 本時で扱う道徳的価値への方向付けである。
イ	○つゆとときの2人は、なぜこんなに悩んでいるのでしょうか。 ・あんなにお世話になったのに、何の恩返しもできないのは苦しいのだと思う。 ・大きな親切を受けて、そのままでは悪いと思っている。	感謝の気持ちを行為や態度で表せないつゆ、ときのモヤモヤした気持ちに共感させたい。 中心的な発問へのつなぎの発問である。
ウ	◎どうすることがご恩にこたえることになるのでしょうか。 ・自分たちが受けた親切を、他の困っている人に返していくことがご恩にこたえることになると思う。 ・多くの人たちのおかげで、今の自分たちがいるから、精一杯生きていくことがご恩にこたえることになると思う。	多くの人々の支え合いや助け合いによって、今の自分の生活が成り立っていることに気付かせたい。 ねらいに直結した発問である。
エ	○皆さんが、こうして生活していけるのは、どれだけ多くの方の支えがあるからだと思いますか。	教材を通して生み出された考えや価値観を、自分たちの生活にあてはめて想像させたい。 実生活につなげる発問である。

1 主題名 「支え合いや助け合いに感謝して」

2 ねらいと教材

感謝について多面的に考えたり、自分の生活が多くの人々の支えで成り立っていることを理解したりして、自分を支える多くの人々に感謝しようとする態度を育てる。

<教材名「病気の父を迎えに常陸国へ」、内容項目「感謝」>

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値について (学習指導要領解説をもとに記述)

よりよい人間関係を築くためには、互いを認め合うことが大切であるが、その根底には、相手に対する尊敬と感謝の念が必要である。人々に支えられ助けられて自分が存在するという認識に立つとき、相互に尊敬と感謝の念が生まれてくる。そして、それは、日々の生活、あるいは自分が存在することに対する感謝へと広がる。感謝の気持ちは、人が自分のためにしてくれている事柄に気付くこと、それはどのような思いでしてくれているのかを知ることで芽生え、育まれる。

高学年においては、多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っている生活そのもの、更にはその中で自分が生きていることに対する感謝まで広げることが大切である。

(2) 児童の実態について (次のような内容を記述)

○ねらいとする内容項目に関わって、これまでどのような指導を行ってきたか、また児童がどのような体験や経験をしているのかを示す。また、その結果として、どのような成果や課題があるのかを示す。

○アンケートや意識調査等のデータから解釈することも考えられる。

○ねらいとする内容項目に関わって、これまでの指導や体験等の結果として浮かびあがる成果や課題から、補充・深化・統合の方向性を示す。

⇒これまでの指導等を振り返り、指導の機会や児童の経験が少ない場合には、本時でしっかり補う必要がある。つまり、補充という目的になる。

⇒これまでの指導等を振り返り、より一層深く考えさせたり、感じさせたりする必要があると判断すれば、それは、深化という目的になる。

⇒様々な機会ですんだことを、合わせて考えさせたり、それらの関連に気づかせたりして、新たな感じ方や考え方を生み出すことを目的とすれば、それは統合といえる。

(3) 教材について (教材のあらすじや特質、教材の活用の仕方について記述)

本教材は、つゆとときの姉妹が、旅の途中で病気になった父親を常陸国(茨城県)まで迎えに行くという県内に伝わる実話をもとに作成されている。姉妹は、約2ヶ月間かけて常陸国までたどり着くが、旅の途中や常陸国に着いてからも、多くの人々から温情を受ける。ふるさとに戻り、多くの人のご恩に対して、何もできないことを悩み、自分たちのこれからの生き方を考え始めるといった内容である。

本時は、父親の言葉を聞き、つゆとときが考えはじめる場面を活用し学習の中心とする。まず、指導内容に関する道徳的な問題状況を明らかにするため、つゆとときが何を悩んでいるのかを考えさせる。そして、その問題状況に対して、解決策を多面的に考えさせるような問題解決的な学習を展開していく。このように、感謝という道徳的価値を児童たちに多面的にとらえさせることができる教材である。

4. 学習指導過程

	学習活動・主な発問	予想される児童の反応	指導上の留意点
導入 3分	<p>1. 親切を受けたときの態度や行為について考える。</p> <p>『他人から親切にされたら、 □□□□べきだ。』</p> <p>○□□□□の中には、どんな文が入りますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧にお礼を言うべきだ。 ・感謝の思いを態度で表すべきだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のねらいに関わる問題意識をもたせる。 ・2～3人程度、発表させる。 ・感謝について考えていくこと、大分県の実話であることを紹介し、教材を配布する。
展開 39分	<p>2. 教材を読んで、話し合う。</p> <p>○つゆとときの2人は、なぜこんなに悩んでいるのでしょうか。</p> <p>(中心的な発問) ◎どうすることがご恩にこたえることになるのでしょうか。</p> <p>(補助発問・・・必要に応じて) ・どうして、精一杯生きることがご恩にこたえることになるの。</p> <p>・手紙を書いたり、探したりできないから悩んでいるのではないかな。</p> <p>3. 学習したことを自分の生活に置き換えて、想像してみる。</p> <p>○皆さんが、こうして生活しているのは、どれだけ多くの方の支えがあるからだと思いますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・あんなにお世話になったのに、何の恩返しもできないのは苦しいのだと思う。 ・大きな親切を受けて、そのままでは悪いと思っているから。 ・自分たちが受けた親切を他の人に返していくことがご恩にこたえることになると思う。 ・多くの人たちのおかげで、今の自分たちがいるから、精一杯生きていくことがご恩にこたえることになると思う。 ・感謝の気持ちを忘れずに生きていくことが、ご恩にこたえることになる。 ・自分の命や他の人のことを大切にしながら生きていく。 ・家族だけではない。 ・自分を支えている人はこんなにたくさんいるんだ。 ・今日1日だけでも、こんなにいるんだな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教材は、教師が読み聞かせる。 ・道徳的価値に関わる問題の状況を明らかにしていく。 ・ここでは時間をかけすぎないように留意する。 ・登場人物が抱える道徳的価値に関わる問題の解決に向けて考えさせる。 ・グループ活動やペア活動も考えられる。 ・ワークシートやノート等に考えを書かせる。 ・手紙を書いたり、相手を探したりなど物理的な解決策を述べる子には、できないから悩んでいることを伝え、他の考えに着目させる。 ・ノートにまとめさせたり、イメージマップ等を書かせたりすることも考えられる。 ・家族だけではなく、いないと困る人も想像させる。
終末 3分	<p>4. 補助教材「200年の時を経てつながる人と人の絆」を聞く。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・補助教材の読み聞かせをして、本時の学習の余韻をもたせて授業を終わる。

Ⅱ 中学校用の道徳教材

Ⅱ章は，3部構成になっています。

1. 教材になった先人の紹介です。授業にも活用できます。
2. 教材の概要や作成の意図を示しています。
3. 学習指導案ができるまでの教材研究の方法の一例を示しています。研究会や校内研修等にも活用できます。



1. 「^{しげみつ}重光 ^{まもる}葵」って、どんな人？

プロフィール

外交官として、イギリス、中国、ソ連等に赴任、後に外務大臣となる。

終戦時には、国の主席全権代表として、アメリカの戦艦ミズーリ号の上で、降伏文書に調印する。

戦後も政党の総裁や外務大臣として活躍し国際連合加盟時には、日本政府の代表として国連総会で「日本はある意味において東西のかけ橋となり得る」という有名な演説を行った。

出典：『きつき偉人伝』杵築市教育委員会



若き日のヒストリー

- 1887（明治20）年 大野郡三重町（豊後大野市）で生まれる。
- 1890（明治23）年 家族とともに速見郡八坂村に転居（現在の杵築市）。
- 1892（明治25）年 八坂尋常小学校（杵築市立八坂小学校）に入学。
- 1899（明治32）年 杵築中学校（大分県立杵築高等学校）に入学。
- 1904（明治37）年 杵築中学校を主席で卒業。
- 1904（明治37）年 熊本の第五高等学校に入学。
- 1907（明治40）年 東京帝国大学法学部独法科に入学。
- 1911（明治44）年 外交官試験合格。
- 1911（明治44）年 最初の任地ベルリンに赴任。
- 1914（大正3）年 ロンドンに赴任。
- 1918（大正7）年 ポートランドに赴任。

これ以後も、中国やドイツ等で勤務し、国際外交の舞台で活躍する。

出典：『若き日の重光葵』大分県立先哲史料館

エピソード

エピソード 1

満州事変が起きると、日本と中国の関係はよくない方向に向かいました。そんな中、上海に赴任していた重光葵は、日本と中国の停戦交渉に努力しました。

1932（昭和7）年4月28日、日本と中国の停戦がようやくまとまりました。しかし、翌日、重光葵は、当時の天皇誕生日の祝賀式典で爆弾によって負傷し、右足を切断することになりました。その手術の直前に、重光葵はベッドの上で、自ら停戦協定の書類に署名したのです。

エピソード 2

1945（昭和20）年8月14日、日本政府はポツダム宣言を受諾し、翌日に国民に発表し戦争が終わりました。

外務大臣に就任した重光葵は、9月2日、日本政府の代表として、東京湾に浮かぶアメリカの戦艦ミズーリ号の上で降伏文書に署名をしました。この時、中津市出身の梅津美治郎^{うめつよしじろう}も、日本の代表として署名しました。

大分県出身の2人が、日本の代表として関わったのです。

エピソード 3

1956（昭和31）年12月18日、日本の国際連合加盟が決まり、重光葵は国際連合の総会で日本の代表として演説を行いました。

国連総会での演説の後、1957（昭和32）年、1月15日、重光葵は大分県立杵築高等学校で、母校の生徒たちに対して、講演を行いました。この時、「志四海」という言葉を残します。

同年1月26日に狭心症の発作により、69歳の生涯を閉じました。世界80カ国の代表たちが、重光葵に黙祷をささげました。

※「志四海」は、「四海を志す。志が全世界を覆う。志を全世界に及ぼす。」という意味。

アクセス

もっと、くわしく知りたい人は、行ってみよう。

○「重光邸 無迹庵」^{むせきあん} 〒873-0014 杵築市大字本庄 893-1

○「山溪偉人館」^{さんげい} 〒873-0224 国東市安岐町山口 567-3



2. 中学校用の教材

お知らせ

- 授業で使う生徒用の教材は、本書の巻末に収録しています。
- 巻末に収録している教材には、挿絵や語句の説明等もあります。
- 授業の際には、巻末の教材を印刷してご使用ください。

日本は東西のかけ橋

1. あらすじ

○プロローグ（重光葵の紹介）

○停戦協定

- ・日本と中国の関係が悪化
- ・重光の粘り強い停戦交渉

○重光の決意

- ・当時の天皇誕生日の式典に出席する重光
- ・停戦協定の書類に自ら署名することを嘆願する重光
- ・手術を延期し、痛みをこらえ、ベッドの上で署名する重光

○その後の日本

- ・1933年 日本が「国際連盟」を脱退する。
- ・1937年 日中戦争が始まる。
- ・1941年 日本がハワイ真珠湾とマレー半島を攻撃する。
- ・1945年 広島と長崎に原子爆弾が投下される。
日本がポツダム宣言を受諾し、無条件降伏する。

○苦難の再出発

- ・日本の代表として戦艦ミズーリ号の上で、降伏文書に署名する重光
- ・戦争の責任を問われ、4年7か月にわたり刑務所に収監
- ・日本を国際連合に加盟させたいと強く願う重光

○日本の国際連合加盟

- ・外務大臣に就任した重光
- ・国際連合加盟を果たすため、尽力する重光
- ・国際連合の総会の場面

○ふるさとへ

- ・杵築高校で、生徒たちに対して講演を行う重光

○エンディング（69年の生涯）



2. 教材に盛り込んだ内容について

○ねらいとする内容項目（国際理解、国際貢献）を明確にするために

他国を尊重し国際的視野に立って、世界の平和について考えたり、世界の情勢に目を向けたりする態度につながるように、以下のような内容で構成しました。

- ・国と国との衝突を力によって解決してはならないという信念を貫き、話し合いで解決しようと努力する姿
- ・日本の国際連合加盟のために努力する姿
- ・国際連合の総会での演説の内容



○生徒が立ち止まって考える教材にするために

教材のタイトルは「日本は東西のかけ橋」としました。授業の始めに、この言葉の意味を考えさせることにより、ねらいとする道徳的価値への方向づけができると考えます。

教材の前半には、重傷を負いながらも自分の体のことよりも、中国との停戦協定を一番に考える場面を取りあげました。この場面では、重光葵のそのような行為に対して、生徒一人一人が様々な思いを抱くことが期待できます。

また、後半には、国際連合の総会での演説文を載せています。演説の文章を、重光葵の生き方と重ねて考えさせるような学習が展開できます。



○「重光葵」の魅力を伝えるために

本教材では、大分県の生徒たちに、大分県の先人である重光葵の国際連合加盟時の演説を知ってもらいたいと考え、戦後の場面を中心に取り上げました。

「日本は東西のかけ橋となり得る。」という国連総会での言葉は、大分県の先人の演説であると知れば、郷土への誇りにもつながっていくのではないかと考えます。

国際連合加盟に関わって、日本の代表として総会に出席し演説を行うといった大役を果たした後、郷土の大分県に帰り母校である杵築高校で講演を行い、後輩たちに「志四海」という言葉を残したのも魅力の一つです。

「志四海」と「日本は東西のかけ橋となり得る。」という2つの言葉を比較させたり、2つの言葉の関連を考えさせたりするような学習も考えられます。



○国連総会での演説について

実際の演説は、英語による約15分のスピーチとされています。

外務省のホームページから検索すると、演説の全文（英文版と日本語版）を見ることができます。

本教材においては、すべての文を掲載することはできませんので、実際の演説の文章を参考にしながら、中学生にわかるような表現にして、演説の一部を示しています。

3. 教材研究編

3-1 内容項目

中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（平成 27 年7月）において、内容項目に関して述べられていることを整理してみます。

◇本教材に関する内容項目 【国際理解、国際貢献】

世界の中の日本人としての自覚をもち、他国を尊重し、国際的視野に立って、世界の平和と人類の発展に寄与すること。

◇内容項目の概要

○「国際理解、国際貢献」の必要性

- ・環境や資源、食糧や健康、危機管理など、一地域や一国内にとどまる問題ではない。
- ・日本人が自分たちだけの幸せを追い求めることに終始することは難しい。

○他国を尊重する

- ・他の地域や国々はそれぞれの文化や伝統、歴史をもっており、他の地域や国々がもっている理想等を、違いは違いとして理解する。

○国際的視野に立つ

- ・広く世界の情勢に目を向けつつ、国際理解に努める。

○世界の平和と人類の発展に寄与する

- ・日常生活の中で社会連帯の自覚に基づき、あらゆる時と場所において協働の場を実現していく努力こそ、平和で民主的な国家及び社会を実現する根本である。

◇指導に当たって

- ・他国には、日本と同じように、その国の伝統に裏打ちされたよさがあることや、その国の独自の伝統と文化に各国民が誇りをもっていることなどを理解させる。
- ・様々な文化のもつ多様性の尊重や価値観の異なる他者との共生などについても考えを深める必要がある。
- ・世界の平和と人類の発展に貢献する理想を抱き、その理想の実現に努めることが大切である。その理想の実現のための基本になるのは、どの国の人々も同じ人間として尊重し合い、差別や偏見をもたずに公正、公平に接するということである。

グローバル化が進む今の時代に生きる中学生には、日本のことだけでなく、世界の情勢に目を向けることの大切さや世界の平和について、他人事ではなく自分事として、考えさせたいですね。

他の内容項目においても、解説書で述べられていることを自分なりに整理してみてください。



3-2 教材の分析

(例)

人の行動や言葉の裏側には「心」が存在する。それは、ある考え方やその人がもつ価値観等である。道徳教材には、人物の道徳的な行為が描かれている場合が多い。人物の道徳的な行為の背景にある価値観等を、指導者がまず明らかにしておく必要がある。

登場人物の言葉や行動	言葉や行動の背景にある価値観等
<p>○「お願いがあります。停戦協定の書類に署名するまで、手術を待っていただけませんか。自分で署名して、停戦を確かなものにしたいのです。」</p> <p>○「今日の日本の政治、経済、文化は、過去一世紀にわたる東洋と西洋の融合の産物です。そういった意味で、日本は東西のかけ橋となり得ると思います。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他の地域や国々は、それぞれの文化や伝統、歴史をもっており、違いは違いとして理解し尊重していかなければならない。 (国際理解, 国際貢献) ・どんな困難があっても、自分の決めた目標は最後までやり遂げなければならない。 (克己と強い意志) ・他の地域や国々は、それぞれの文化や伝統、歴史をもっており、違いは違いとして理解し尊重していかなければならない。 ・日本のことだけを考えるのではなく、世界の情勢に目を向け、他国のことも考えていかなければならない。 ・世界の平和と人類の発展に貢献したい。

考えられる発問の例

- 「重傷を負いながらも、重光はなぜ自分の手で署名することにこだわったと思いますか。」
- 「自分の手で署名することと、他の人が署名することに違いがあるのでしょうか。」
- 「『日本は東西のかけ橋となり得る』という言葉には、重光葵のどんな思いが込められていると思いますか。」
- 「『日本は東西のかけ橋となり得る』とは、私たちがこれからどのようにしていくことだと思いますか。」
- 「重光葵は、今を生きる私たちに、どんなことを期待していると思いますか。想像してみてください。」
- 「重光葵の生き方から、あなたは何を学びましたか。」等

どのような授業を行うかは、授業者の意図によります。どのようなことをじっくり考えさせたいのか、またどのようなことに気付かせたいのか、授業者が明確にして発問を決めることが大切です。

また、次のことに留意してください。教材に書かれている言葉や文が答えになるような発問では、読み取り中心の学習になってしまいます。



3-3 発問の構成 (例)

道徳の授業づくりでは、発問の構成が大切である。言わば、授業の骨組みともいえる。発問の構成について、中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編には次のように示されている。

発問を構成する場合には、授業のねらいに深く関わる中心的な発問をまず考え、次にそれを生かすためにその前後の発問を考え、全体を一体的に捉えるようにするという手順が有効な場合が多い。

<発問を考える順序>

- ・ウ⇒イ⇒エ⇒アという順序で発問を考え、授業展開の全体像を描いた。
- ・ウは、中心的な発問であり授業のねらいに関わる。授業では多くの時間をかける。
- ・イは、ウにつながっていくような発問である。イの学習が、ウの学習を支えていく。
- ・エは、実生活への意識化を図るための発問である。ここでは無理に発表させなくてもよい。ノートやワークシート等にかかせたりすることも考えられる。
- ・アは、授業のスタートであり、短時間で本時の学習の見通しを持たせたり、動機付けを行ったりするものである。
- ・ア、イ、エの発問は、ウを最大限に生かすための発問であり、短時間で行う。

	発問の構成	発問の意図
ア	○「日本は東西のかけ橋」とは、どういう意味だと思いますか。想像してみてください。 ・日本が、他の国と国の間に立って関係をつくる。 ・太平洋近くの国と大西洋近くの国をつなぐ役割。	教材の中心場面と関連のある言葉の意味を想像させ、教材を読む際の興味を持たせるとともに、学習の方向を示したい。 本時で扱う道徳的価値への方向付けである。
イ	○重傷を負いながらも、重光葵はなぜ自分の手で署名することにこだわったと思いますか。 ・自分の手で何とか平和を取り戻したい。 ・他の者には任せたくない。停戦を確実にしたい。	国と国の衝突を武力ではなく、話し合いで解決すべきだという重光葵の信念を理解させたい。 中心的な発問へのつなぎの発問である。
ウ	◎「日本は東西のかけ橋となり得る」という言葉には、重光葵のどんな思いが込められていると思いますか。 ・二度と世界大戦を起してはならない。 ・国と国が争うことは不幸なこと。日本が、中心となり世界の平和をつくっていくのだ。	他の地域や国々は、それぞれの文化や伝統、歴史を持っており、違いは違いとして理解し、尊重していかなければならないことを重光葵の演説や重光葵の言動を参考にしながら考えさせたい。 ねらいに直結した発問である。
エ	○世界の平和と人類の幸福のために、私たちにできることを考えてみましょう。 （「私たちの道徳」P217） ・他の国の文化や伝統を正しく理解していくこと。 ・外国で今、何が起きているのかを知るように努力すること。	日本のことだけを考えるのではなく、世界の情勢に目を向け、他国のことも考えていかなければならないことを気付かせたい。 教材を通して生み出された考えや価値観を、実生活につなげる発問である。

1 主題名 「世界とともに生きる」

2 ねらいと教材

平和は、全ての人々が考えるべき重要な課題であることを理解させ、日本のことだけを考えるのではなく、広く世界の情勢に目を向けようとする態度を育てる。

<教材名「日本は東西のかけ橋」、内容項目「国際理解、国際貢献」>

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値について(学習指導要領解説をもとに記述)

今日、私たちが抱える問題、例えば環境や資源、食料や健康など、どれも一地域や一国内にとどまる問題ではない。したがって将来の日本を担う中学生には、日本のことだけを考えるのではなく、国際的視野に立ち、広く世界の情勢に目を向けつつ、日本人としての自覚をもって国際理解に努めることが必要である。国際社会の中でグローバルに活躍するために必要な態度や考え方である。

このような態度や考え方の基本となるのは、国によってももの感じ方や考え方、生活習慣などが違って、どの国の人々も同じ人間として尊重し合い、差別や偏見をもたずに公正、公平に接するという道徳的な価値である。そのことを踏まえ、平和は、全ての国々の人々が模索すべき道徳的課題の一つであるということを理解させる必要がある。

(2) 生徒の実態について(次のような内容を記述)

○ねらいとする内容項目に関わって、これまでどのような指導を行ってきたか、また生徒がどのような体験や経験をしているのかを示す。また、その結果として、どのような成果や課題があるのかを示す。

○アンケートや意識調査等のデータから解釈することも考えられる。

○ねらいとする内容項目に関わって、これまでの指導や体験等の結果として浮かびあがる成果や課題から、補充・深化・統合の方向性を示す。

⇒これまでの指導等を振り返り、指導の機会や生徒の経験が少ない場合には、本時でしっかり補う必要がある。つまり、補充という目的になる。

⇒これまでの指導等を振り返り、より一層深く考えさせたり、感じさせたりする必要があると判断すれば、それは、深化という目的になる。

⇒様々な機会学んだことを、合わせて考えさせたり、それらの関連に気づかせたりして、新たな感じ方や考え方を生み出すことを目的とすれば、それは統合といえる。

(3) 教材について(教材のあらすじや特質、教材の活用の仕方について記述)

本教材は、大分県出身の重光葵の生き方をもとに作成されている。重光葵は外交官として上海に赴任し、国同士の衝突を話し合いで解決しようとするが、日本は戦争の道を歩んでいく。そして、重光葵は戦後の日本を国際連合に加盟させるために尽力し、国連総会の場で世界中が認める演説を行った。

本時は、国連総会における重光葵の演説の言葉を活用し中心的な学習とする。まず、重光葵が停戦協定を自らの手で行おうとする場面を考えさせ、平和への強い信念を理解させる。そして、「日本は東西のかけ橋となり得る」という言葉に込められた重光葵の思いを考えさせていくようにする。将来の我が国を担う中学生が、日本のことだけでなく、世界の情勢に目を向けていく大切さを意識できる教材である。

4. 学習指導過程

	学習活動・主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入 3分	1. 「日本は東西のかけ橋」という言葉の意味を考える。 ○「日本は東西のかけ橋」とは、どういう意味だと思いますか。想像してみてください。	・日本が、他の国と国の間に立って関係をつくる。 ・国と国をつなぐ役割。	・本時のねらいに関わる問題意識をもたせる。 ・2～3人程度、発表させる。 ・この言葉は、大分県出身の重光葵の演説の言葉であることを紹介し、教材を配布する。
展開 44分	2. 教材を読んで、話し合う。 ○重傷を負いながらも、重光葵はなぜ自分の手で署名することにこだわったと思いますか。 (中心的な発問) ◎「日本は東西のかけ橋となり得る」という言葉には、重光葵のどんな思いが込められていると思いますか。 ※生徒の考えを的確につかんだり、さらに考えを引き出ししたりする補助発問を必要に応じて使うようにする。 (補助発問・・・必要に応じて) ・なぜ、そう思うの。 ・本当にこれでよいのかな。 ・○○さんの考えをみなさんはどう思いますか。等 3. 学習したことを自分の生活に置き換えて考える。 ○世界の平和と人類の幸福のために、私たちにできることを考えてみましょう。 (「私たちの道徳」P217)	・自分の手で何とか平和を取り戻したい。 ・他の者には任せたくない。停戦を確実にしたい。 ・二度と世界大戦を起してはならない。 ・国と国が争うことは不幸なこと。日本が、中心となり世界の平和をつくっていくのだ。 ・これからは、日本が中心となり世界の平和を進めるのだ。 ・戦争の悲惨さを知っている日本だからこそ、世界をつなぐ役割ができるのだ。 ・他の国の文化や伝統を正しく理解していくこと。 ・外国で今、何が起きているのかを知るように努力すること。	・教材は、教師が読み聞かせる。 ・重光葵の考え方や信念を理解させる。 ・ここでは、時間をかけすぎないように留意する。 ・時間短縮のため1～2分程のペアトーク等も考えられる。 ・ねらいとする道徳的価値に関わる学習であるので、時間をかけ、グループで話し合わせたり、ワークシート等を書かせたりする活動も考えられる。 ・一つの考えに集約するようなことはせず、それぞれの考え方の違いが見えるように板書に整理し、多面的に捉えさせるようにする。 ・「私たちの道徳」P217 やワークシート等に考えを書かせる。
終末 3分	4. 「私たちの道徳」P219 のメッセージを読む。		・「私たちの道徳」P219 のメッセージを読んで、本時の学習の余韻をもたせて授業を終わる。

Ⅲ 地域教材の開発と活用

特別の教科 道徳（道徳科）は，平成 30 年から小学校，平成 31 年から中学校で全面実施となります。

道徳科の解説書（平成 27 年 7 月）には，「道徳科は，主たる教材として教科用図書を使用するが，併せて地域教材などの開発と活用が重要である。」と述べられています。



1. 地域教材の意義



なぜ、道徳の授業に地域を素材とした教材が必要なのでしょう？

例えば、私たちが郷土の文化財や伝統芸能等を誇りに思い大切にするのは、単に昔から伝えられ、古いものだから価値があるということではなく、そこに込められた様々な先人の崇高な営み（願いや考え方、生き様等）を大切にしたいと考えるからです。

人はいずれの地であれ、地域の中で生活し、成長していくものです。児童生徒は、自然を含め、地域の様々な文化や人との関わりを通して成長していきます。児童生徒の道徳性を育む上においても、地域社会や地域教材のもつ意義は大きいと言えます。

地域の「ひと、もの、こと」との関わりの中で、児童生徒の郷土愛も育ていけるのです。

道徳の授業に活用する地域教材には、どのようなものがあるのでしょうか？

地域教材と言えば、地域の「自然」「伝統と文化」「先人の伝記」等を題材にしたものを想像するでしょう。この3つ以外にも、特別の教科 道徳の解説書（平成27年7月）には、次のようなものが紹介されています。

○「生命の尊厳」を題材にしたもの

生命の尊厳に関わる素材には、生命の誕生や死を取り上げたものから、動物愛護や救命、医師の努力など幅広く考えられます。

○「スポーツ」を題材としたもの

スポーツを題材とした教材には、目標に向かって挑戦するアスリートの姿が力強く描かれています。そこには、挫折したり苦悩したりする人間の弱さもあり、児童生徒の共感と呼んだり憧れを抱いたり、心に響くものが多くあります。

○「情報化への対応などの現代的な課題」を題材としたもの

- ・情報化に関しては、機器の活用の仕方を扱うのではなく、機器を活用する上で必要な「節度、節制」や「規則尊重」などについて考えを深めていけるような教材が必要です。
- ・道徳科で扱う道徳的諸価値は、現代社会の様々な課題に直接関わっています。例えば、環境、貧困、人権、平和等といった課題は、「公正、公平、社会正義」「国際理解、国際貢献」「生命の尊さ」等様々な道徳的価値に関わる葛藤があります。



大分県は、美しい自然や伝統的な文化、歴史遺産がたくさんあります。大分県内にある魅力ある素材を探してみましょう。教材開発は、まず素材探しからです。

2. 大分県にある魅力的な素材（例）

①素材

- ～例～
- ・「世界農業遺産」
 - ・「ジオパーク」
 - ・「祇園まつり」
 - ・「アサギマダラ」
 - ・「田染荘」
 - ・「関アジ関さば」
 - ・「ホタルまつり」
 - ・「エコパーク」
 - ・「頭料理」
 - ・「廣池 千九郎など地域の先人」
 - ・「大分国際車いすマラソン大会」
 - ・「石橋」
 - ・「国宝」
 - ・「太陽の家」
 - ・「高崎山」
 - ・「シチトウイ」
 - ・「獣医師」
 - ・「河津桜」
 - ・「銘菓」
 - ・「竹宵まつり」
 - ・「城下カレー」
 - ・「大分県先哲叢書」
 - ・「快眠活魚」
 - ・「干しいたけ」
 - ・「きつね踊り」
 - ・「つり橋」
 - ・「神楽」
 - ・「地域出身のアスリート」等



素材が見つかったら、下の6つの題材（テーマ）のどこにあてはまるのか検討してみましょう。

自校の児童生徒にとって、どの題材が必要なのか。また教育課程を改善するためにはどの題材が不足しているのか等を検討すると、教材化の方向性を定めることができます。

②題材

生命の尊厳

自 然

伝 統 と 文 化

先 人 の 伝 記

ス ポ ー ツ

情報化への現代的な課題



道徳の授業は、主に人の生き方に関わる学習です。ですから、人との関わりが見えるという視点が必要です。

例えば、「自然」について教材化しようと考えた場合にも自然保護という活動を行っている人物等がいるはずです。

③教材

- 適切な道徳的価値に関わる事象や人物が取り上げられているもの。
- 悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係の理解等の課題も含め、児童生徒が深く考えることができるもの。
- 人間としてよりよく生きる喜びや勇気を与えられるもの。
- 多様な見方や考え方ができる事柄を取り扱う場合には、特定の見方や考え方に偏った取り扱いがなされていないもの。

3. 地域教材作成の手順

教材の開発には、様々な方法や手順が考えられますが、ここでは、読み物教材の開発の手順について一例を示します。

①素材を見つけよう

素材は、それぞれの地域にたくさんあると思います。日頃からニュース、新聞などに目を通し、身近な出来事に興味をもつことが大切です。

見たり聞いたりしたことを、6つの題材ごとに分類・整理しておくことで教材化しやすくなります。

題 材

生命の尊厳

自 然

伝 統 と 文 化

先 人 の 伝 記

ス ポ ー ツ

情報化への現代的な課題

②情報を集めよう

- 郷土資料、パンフレット
- 一般書籍
- 情報通信ネットワーク
- 歴史資料館や記念館
- 過去の新聞記事や市報
- 県立図書館や市立図書館
- 地域の方や専門家にインタビュー

※専門家に聞いてみよう

素材によっては、専門家の協力が必要な場合があります。本書に収録している2つの教材は、専門家に協力をいただき作成したものです。

【専門家にインタビューする利点】

- 新たな情報やなかなか手に入らない貴重な書籍や資料などを提供してくれる。
- 専門家の話を聞くことで、さらに興味が高まり、教材作成の意欲につながる。
- 授業展開のヒントとなることが多い。
- 教材そのものの不備や間違いについて、助言をしてもらえる。
- 教材作成の際、著作権の問題等が解決できる場合が多い。

③調べたことを「教材」にしてみよう

- ①ねらいとする内容項目及び対象学年を決定する。
- ②登場人物や中心となる場面などを設定する。
- ③ストーリーの大要や「起承転結」等を設定する。
※ここまでは、ストーリー全体の「設計図」のようなものです。
- ④「設計図」をもとに、字数を考慮しながら、実際に読み物等の「形」にしてみる。

※読み物教材の場合の字数制限の目安

字数制限には、明確な規定はありません。字数やページ数は様々である。大切なのは、子どもの実態に合わせて決めることです。

(例) 4ページ構成の場合(1ページ分は、挿絵や写真等)

- ・低学年・・・450字×3＝1350字程度
- ・中学年・・・600字×3＝1800字程度
- ・高学年・・・750字×3＝2250字程度
- ・中学校・・・短いものから、3000字を超えるもの

※あくまでも大まかな目安です。

※例えば、高学年の教材であっても、1500字程度も考えられます。

④授業をイメージしながら「教材」を修正しよう

※ここからが、大切な作業です。実際に授業の様子や発問などをイメージしながら、修正していきます。

【修正の視点】

- 児童生徒に考えさせたい部分や必要のない情報は、削除していく。
- 児童生徒が考えやすいように、人物が立ち止まって考える場面や迷いの場面などを書き加えたり、人物の心の動きを直接記述せず、副詞などを効果的に活用したりするなどの表現の工夫をする。
- ねらいとする道徳的価値に関わる場面が描かれているか吟味する。
- 挿絵や補助資料などをどこに位置づけるか吟味する。
- 児童生徒にとって、わかりやすい表現になっているか吟味する。

教材作成の際に留意しなければならないのは、著作権の問題です。前頁でも紹介しましたが、専門家に協力を依頼すると、著作権の問題も解決することが多くあります。詳しくは、文化庁webサイトで確認しましょう。

(<http://www.bunka.go.jp/chosakuken/index.html>)

作成協力者等（順不同）

荘田 啓介 氏	臼杵市二孝女顕彰会 事務局長 野津町きつちよむ史談会 事務局長
佐藤 晃洋 氏	大分県立先哲史料館 館長
細井 雅希 氏	きつき城下町資料館
重光邸 無 ^む 迹 ^{せき} 庵	
杵築市教育委員会	
臼杵市教育委員会	

参考にした書籍や資料等

出典：集英社文庫コミック版『NHKその時歴史が動いた 昭和史復興編』国際連合加盟
重光葵 日本から世界へのメッセージ

著者：広井てつお

出典：PHP 研究所『調印の階段』

著者：植松三十里

出典：新日本文芸協会『実話 病父を尋ねて三百里』

著者：橋本 留美

出典：「連載 実話二孝女物語」臼杵市の市報に掲載

著者：荘田 啓介

出典：『若き日の重光葵 ～外交官を目指した青年の足跡～』

作成：大分県立先哲史料館

出典：『きつき偉人伝』

作成：杵築市教育委員会

『重光葵 連合国に最も恐れられた男』 福富健一 著 講談社

『親子で読む大分偉人伝』 辻野 功 著 一般社団法人大分学研究会

『大分の先人たち 心を育てる物語』 大分県小学校道徳教育研究会 著 光文書院

『200年前の友情が今新たなドラマに！』 荘田 啓介 著 臼杵市二孝女顕彰会

『ともに歩む』 高校用道徳副読本 茨城県教育委員会

『心の響き ～臼杵の先人に学ぼう～』 臼杵市教育委員会

『臼杵の歴史発見 ルート18』 臼杵市・臼杵市教育委員会

『豊後国の二孝女』 DVD 臼杵市二孝女顕彰会

『広島県道徳教育指導資料 地域教材開発の手引』 広島県道徳教育指導資料作成委員会
広島県教育委員会

イラスト協力 イラスト集 人・人物のイラストわんパグ

おわりに

平成27年3月に小中学校の学習指導要領等が一部改正され、これまでの「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」として実施されることになりました。小学校では平成30年、中学校では平成31年に全面実施となります。

将来の変化を予測することが困難な時代には、自らの人生や社会における答えが定まっていない問いを受け止め、多様な他者と議論を重ねて探求し、「納得解」を得るための資質・能力が求められます。このような意義や価値を担う道徳の授業は、学校教育における道徳教育の要として、これまで以上に積極的な役割を果たさなければなりません。そして、誰よりも重要な役割を担っているのは道徳の授業を直接行っている一人一人の先生方です。

道徳の授業が、主題やねらいの設定のない単発的な生活指導の時間になったり、一つの指導過程のみを「型」として過度に固執したりするようなことを避け、「考え、議論する道徳」を目指し柔軟に授業を構想していく必要があります。

本書は、道徳の授業づくりや教材づくりについての一例を示しました。道徳の教科化に対応するためにも、道徳の授業研究や授業改善の取組は急務です。本書が、その一助となれば幸いです。大分の子どもたちの夢や未来に向かう意欲を育むためにも、道徳の授業の改善及び充実に向けて、ご尽力くださるようお願いいたします。

「志四海」は、「四海を志す。志が全世界を覆う。志を全世界に及ぼす。」という意味であり、若い人たちが、この言葉を胸に大きな志を抱き、その目標達成のために日々努力を重ねてほしいという重光の願いが込められているのであろう。



国連総会の演説から三十九日後、一月二十六日、重光葵は、自らの使命を果たし、その人生の役割を終えたかのように息を引き取った。六十九年の生涯であった。

※四海

- ・四方（東西南北）の海
- ・世界などの意味

世界には今なお多くの重大な問題が存在します。

今日、世界が遭遇している不安と緊張がどのようなものであっても、またその原因がいかなるものであるとしても、国際連合の力によって、平和的に処理し得ない問題はあり得ないと思います。

平和は、地球規模で考えるべきものであり、日本は国際連合が世界における平和政策の中心的推進力を果たすべきものであると信じています。

今日の日本の政治、経済、文化は、過去一世紀にわたる東洋と西洋の融合の産物です。そういった意味で、日本は東西のかけ橋となり得ると思います。このような立場にある日本は、その大きな責任を十分に自覚しています。

日本が国際連合の崇高な目的に対し、誠実に奉仕する決意を有することを再び表明して私の演説を終わります。

演説が終わると、総会の会場は、割れんばかりの拍手でつつまれました。日本が平和国家として国際社会から認められた瞬間であった。重光の演説は、「日本の未来に対する姿勢がはつきりと示された。」と世界の国々から評価を受けた。

国連総会での大役を果たし、重光は故郷の大分県に帰ってきた。

一九五七（昭和三十三年）一月十五日、重光は母校である杵築高校に招かれ、生徒たちに対して講演を行った。この時、重光は、杵築高校に「志四海」という言葉を残した。現在でも、杵築高校では、この言葉が受け継がれている。

※崇高

・巨大なもの、勇壮なものに
対したとき対象に対して抱く
感情

・何にも比較できない偉大さ
を指し、自然やその広大さにつ
いていわれることが多い。

※奉仕

報酬を求めず、また他の見
返りを要求するでもなく、労
働を行うことをいう。

出所後、外務大臣に就任した重光は、日本の復興のためには国際連合への加盟を何としてもやり遂げねばならないと心に決め、世界の国々と良好な関係をつくるため難しい問題にも全力で向き合った。

そして、重光の粘り強い努力もあって、ついに日本の国際連合への加盟が実現した。「国際連盟」を脱退してから二十三年後のことであった。

一九五六（昭和三十一年）年十二月十八日、国際連合の総会において、日本の加盟が認められた。重光は、その総会の場に日本の代表として出席し、世界中に日本のメッセージを発信した。



※演説の文章について

実際の演説は、英語による約十五分のスピーチであったと言われています。

次ページにあるのは、その演説の一部をわかりやすい表現にして載せています。

外務省ホームページで、全文を読むことができます。

しかし、重光の思いとは反対に、戦争は広がっていった。

一九三三（昭和 八）年	日本が「国際連盟」を脱退する。
一九三七（昭和十二）年	日中戦争が始まる。
一九四一（昭和十六）年	日本がハワイのアメリカ軍の基地やマレー半島のイギリス軍を攻撃し、アメリカ、イギリスと戦争を始める。
一九四五（昭和二十）年	広島、長崎に原子爆弾が投下される。 日本がポツダム宣言を受諾し、無条件降伏する。

外務大臣に就任した重光は、一九四五（昭和二十）年九月二日、日本の代表として降伏文書に署名するため、東京湾に浮かぶアメリカの戦艦ミズーリ号へ向かった。

「これでいいのだ。日本は降伏するという現実を受け入れてこそ、再出発できるのだ。」

日本の再出発も、重光の再出発も苦しいものだった。重光は戦争の責任を問われ、四年七か月にわたり刑務所に収監された。

重光は、いつか日本を国際連合に加盟させたいと強く願った。

「戦争の苦しさを知っている日本だからこそ、国際社会の中で武力を用いずに、戦争をとめる役割ができるはずだ。」

国際連合は世界に関する重要な決定を行うところであり、国際連合に加盟することは世界の国々から認められることを意味していたのである。

※国際連盟

第一次世界大戦後の国際平和を維持するためにつくられた。
一九二〇年に四十二カ国で、設立された。
日本は設立の時から加盟していたが、一九三三年に脱退し、世界の中で孤立していく。

※収監

人を監獄に収容すること。

式典も終わりに近づき、参加者が声をそろえて国歌を歌い始めた時である。重光の足もとで爆音が鳴り響き、辺り一面に白い煙が広がった。重光は立ち上がろうとしたが足の自由が利かず、今まで経験したことがない激痛を感じた。その時、群集のざわめきの中から、「犯人だ。犯人がいたぞ。」と怒鳴るような声が聞こえた。

重光は、かけつけた警官に声をしぼり出すように訴えた。

「絶対に犯人に乱暴をしてはいけない。警察署長にもそう伝えてくれ。」

重光の真剣な顔つきを見て、警官は直立し、敬礼で了解を伝えた。

重光の右足は、想像以上に重症であり、切断はまぬがない状態であった。それでも重光は激しい痛みをこらえながら、医師に訴えた。

「お願いがあります。停戦協定の書類に署名するまで、手術を待っていただけませんか。自分で署名して、停戦を確かなものにしたいのです。」

書類の作成にかかる四、五日の間、痛みは続くことになるが、重光の意志は固かった。

事件から六日後、手術の直前に病院のベットの上で、激しい痛みをこらえながら、重光は、停戦協定の署名を自ら行ったのである。



日本は東西のかけ橋

「日本は東西のかけ橋」

大分県杵築市出身の重光葵が残した言葉である。

一九五六（昭和三十一年）十二月十八日は、日本にとって記念すべき日となった。日本が国際連合への加盟を果たしたのである。重光葵はその総会に、日本政府の代表として出席し演説を行った。そこで生まれたのがこの言葉である。

一九三一（昭和六年）年、重光は外交官として、上海に住み、日本と中国との関係を保ったり、日本人の安全を確保したりするなどの仕事をしてきた。その当時、日本と中国の関係は悪化しており、武力衝突することもあった。重光はそのことに、心を痛めていた。

「このままでは、日本と中国は本格的な戦争になってしまう。何とかしなければ。」
重光は、

「国と国との衝突を力によって解決してはならない。戦争は両国の国民を不幸にするだけである。」
という信念を貫き、あくまでも話し合いで解決しようと努力した。上海で起こった武力衝突に対して、重光は中国側と何度も交渉を重ね、日本側の司令官に対しても、繰り返し停戦を説いた。

重光の粘り強い外交と欧米諸国の協力により、ようやく停戦協定をまとめることができた。後は、停戦協定の正式書類に、双方で署名するだけとなった。

一九三二（昭和七年）年四月二十九日、ほっとした気持ちで天皇誕生日の式典に出席した重光は、式典の中で、中国との争いの早期終結に対して喜びのあいさつをした。

※国際連合（一九四五年設立）
第二次世界大戦の後、世界の平和を守るため、多くの国が協力して国際的な問題解決をする場として設立された。

※当時の時代背景

昭和の時代になると、世界中が不景気になり、日本でも生活に苦しむ人々が多くなった。

不景気を回復するために、中国に勢力をのばすという考えが広まっていった。

このような中で、一九三二（昭和六年）年、満州（中国東北）にいた日本軍が、中国軍を攻撃し、満州事変になった。その後、中国各地に武力衝突が広がっていった。

せいに大きな拍手とともに

「お帰りなさい。」

と、明るく声をかけてくれました。そのとき荘田さんは、「つゆととき、初右衛門の三人を支えてくれた常陸太田市の人々の温かさがわかった。人の思いやりや感謝の心は、今も二百年前も変わらないのだ。」

と感じたそうです。荘田さんたちは、初右衛門がお世話になった青蓮寺などを訪問し、三人がお世話になったことに対して感謝の思いを伝えました。

このような交流を経て、平成二十七年十月十日、大分県臼杵市と茨城県常陸太田市は姉妹都市となりました。二百年前の出来事が、二つの市を結び付けたのです。

人は一人では生きてはいけません。人は気づかないところで、多くの人に支えられ生活していることを「二孝女」のお話は私たちに伝えてくれているようです。



※姉妹都市
文化交流や親善を目的とした
地方同士の関係を指す。

二百年の時を経てつながる人と人との絆きずな

〈補助教材〉

大分県臼杵市うすきしと茨城県常陸太田市いばらぎけんひたちおおたしでは、それぞれの市で「二孝女にけんしやう顕彰会」をつくり、活動しています。二つの市の「二孝女顕彰会」は、「二孝女」についての研究をさらに深めたり、互たがいに交流を重ねたりしながら、「二孝女」の物語を多くの人に伝えていきます。

臼杵市二孝女顕彰会の庄田啓介しょうたけいすけさんは、

「二孝女の物語は、生きることの大切さや思いやりの心、感謝かんしゃの心など日本人が忘れてはならないことを私たちに教えてくれている。」

と語っています。

庄田さんたちは、二百年前につゆとときが受けたご恩に對して、二人になり代わり、茨城県常陸太田市へお礼に行くことを決めました。

二〇一一年秋、庄田さんら約五十人が「お礼参り訪問団ほうもんだん」として、

「二百年前、初右衛門と二孝女がお世話になりました。」

と書いた横断幕おうだんまくを持って、茨城県常陸太田市を訪ねました。

庄田さんら訪問団に對して、常陸太田市の人たちは、いつ



※顕彰会けんしょうかい

個人の功績こうせきや善行ぜんこうなどをたたえて広く世間に知らしめることを目的にした会。

「さよなら。いつまでもお元気で。」

親子も、村人たちもお互いに見えなくなるまで手をふった。

二か月後、初右衛門、つゆ、ときの一行は白杵の港に無事到着した。白杵にもどってから、評判は、日に日に村中に広がり、人々はつゆとときを親孝行者としてほめたたえた。

ある日のこと、二人は父に悩みを伝えた。

「村の人たちは、私たちのことをほめてくださいますが、なぜか素直に喜べません。水戸藩の皆様や旅の途中で出会った方々から受けたご恩にこたえたくても、こたえることができません。どうすればよいのでしょうか。」

二人の話を聞いた初右衛門は、目を閉じて静かにこたえた。

「どうすることもできないが、今の私たちがこうして生きているのはどうしてなのか、これからも考え続けようではないか。」

父の言葉を聞き、二人は、しばらくだまっていた。

それから二人は、家の仕事にも村の仕事にも一所懸命取り組んだ。

人々はいっつか、この姉妹のことを「二孝女」とよぶようになった。時代は、明治、大正、昭和、平成と移り、「二孝女」の物語は今でも語りつがれている。



に来て話し相手になつたり、食べ物やお金をもってきたりして、村中で支えてくれたのだ。

青蓮寺の人たちは、お礼まわりに出かけようとする姉妹に対して、

「まずは旅の疲れがとれるまでゆっくり休みなさい。お礼まわりはそれからでも遅くはない。」

と二人の体を心配したが、姉妹は、一軒一軒お礼を言うためにたずねてまわった。四、五日後には五十軒近い家をまわっていた。

このような懸命な姿は村の多くの人たちの心にひびいた。

二人が訪れた家々では、立派なふるまいに感動して、お米や野菜などを恵んでくれる人もいた。二人の評判は、水戸藩の役人にも伝わり、食料や暖ぼう用の薪などがあたらえられた。多くの人たちの支えと二人の懸命な看病のおかげで、初右衛門の病気も回復していった。

つゆとどきが青蓮寺に着いてから四か月が経ち、ついに親子が旅立つ時がきた。水戸藩からは親子に真新しい旅装束と父が乗るためのかごが用意された。白杵藩からは、旅の付き添い役が二名来てくれた。青蓮寺は見送りに来た村人たちでいっぱいだった。皆、目に涙をうかべ別れを惜しんだ。

「ありがとう。ありがとう。」



※藩

藩とは江戸時代に、大名が支配した地域などのこと。

※水戸藩

現在の茨城県中部・北部にあつた藩。

※白杵藩

現在の大分県中部にあつた藩。

※旅装束

旅をするときの服装。

こうして旅を許された二人は、白杵の港から大阪行きの船に乗った。つゆ二十二才、とき十九才の時だった。白杵を出て十七日目、船はやっと大阪の港についた。大阪から、京都そして東海道へと道をたずねながら旅をした。

途中、恐いことや苦しいこともあったが、一緒に江戸まで旅をしてくれた人、食べ物やお金を恵んでくれた人、家に泊めてくれた人もいた。見ず知らずの人たちのあたたかい心が、旅のきつさをいやしてくれた。

江戸、常陸国へと長い道のりを進み、やっとの思いで父のいる青蓮寺にたどりついたのである。

「お父様。」

「つゆ、とき。お前たち、よくぞここまで来たのう。」

初右衛門が旅に出てから七年七か月ぶりに再会した親子は、抱き合って泣くばかりだった。別人のように変わり果てた父を見た姉妹は、その日から懸命に父の看病にあたった。姉妹は旅のためのお金をすべてつかい、村の医者に薬をつくってもらうようにたのんだ。村の医者も父を思う二人の懸命な姿に心を打たれた。

姉妹は休む間もなく、父が今までお世話になっていた村の人たち

のところにお礼まわりに行くことにした。初右衛門が病気になる七年もの間、村の人たちはお見舞い



病気の父を迎えに常陸国へ あたたかい心に支えられた姉妹の旅物語

「つゆ姉さん、やっと着いたわね。」

「うん、ここがお父様のいる青蓮寺よ。」

疲れきった二人の娘が青蓮寺にたどり着いた。つゆとときの姉妹である。二人は豊後国の臼杵藩からはるばる常陸国の青蓮寺まで、病気の父親を迎えにやって来たのだ。

二か月かけて歩いた三百里の道は、二人にとって長く苦しいものだった。

この物語は、今から二百年以上も前の江戸時代にあつた実話である。

つゆとときの父である初右衛門は、亡くなった妻の供養のためにお寺めぐりの旅に出たまま、七年もの間、連絡がとれないままだった。

そんなある日、二人のもとに

「初右衛門は、常陸国の青蓮寺にいる。重い病気で旅を続けるのは難しい。」
という知らせが入った。

これを聞いた姉妹は、今すぐにでも、迎えに行きたかった。親せきから、若い娘の長旅を強く反対されたが、父を思う気持ちは日ましに大きくなり、二人は正式な「旅行許可」をもらうために代官所に出かけ、自分たちの思いを訴えた。代官所の役人たちも、姉妹の父を思う強い気持ちに心を打たれ、常陸国へ旅をすることを許した。

※常陸国の青蓮寺
現在の茨城県常陸太田市
にある寺。

※三百里
約千二百キロメートルの
距離。一里は、約四キロメ
ートル。

※供養
死者の霊に供え物などを
して、その冥福を祈ること。

※代官所
その土地の政治を行う所。



11月1日はあおいた教育の日